

令和6年度 富山県子育て支援・少子化対策県民会議
第1回基本計画策定部会 議事概要

- 1 日 時 令和6年5月16日(木) 10:00~12:05
- 2 場 所 富山県庁4階大会議室
- 3 議 題
(1) 子育て支援・少子化対策に関する新たな基本計画の策定について
(2) 意見交換
- 4 委員発言 以下のとおり

OA 委員

- ・子育て支援・少子化対策は、少子化に伴う人口減少に対して、富山県としてどんな政策を打っていくのかを方向づける大変重要なテーマである。どの課題、対策も関係性があり、一つの施策を重点的に取り組むというより、対策を並行して有機的に関連づけて実施していかなければ、結果はついてこない。若者世代の県外転出が非常に話題になっているが、県外への転出を減少させる対策、こどもを増やす対策は、目の前の課題に対する対応策、未婚率の上昇に伴いこどもが増えないことに対して、将来にわたって原資を生み出す対応策。この両方を両輪として進めていただければと思う。ここ数年が勝負。
- ・企業は常に就労・職場環境を改善していかなければ、市場からレッドカードを突きつけられるため、「働き方改革」という言葉は、すでに大半の企業に浸透しており、第1フェーズのインプットに対する改善はほぼ実施されている。現在は、第2フェーズのアウトプットの段階であり、生産性の向上の違いによって企業間の格差が生じている状況。
- ・生産人口が減少しており、雇用環境の改善はもちろん、企業によっては、賃金の引上げにより人材の確保に努めているが、計画通りに人材を確保できていない。
- ・若い女性の社会減について、県内企業が若者に選ばれていないことは非常に頭の痛い話である。企業のトップの意識改革が、非常に大事だと言われており、女性活躍、あるいは雇用環境について声高に叫んでいるが、若い世代にとってはそれが当たり前になっており、企業がいかにさらに付加価値をつけ、訴えることができるかどうか大きな鍵ではないかと思っている。
- ・もう1つの鍵は、就職予備軍。県内の学生は、県外志向が非常に強いが、県内で受け皿があれば、学生の就職先の幅も県内企業に対して広がるのではないか。

OB 委員

- ・こども計画という特性を持つ計画だが、こどもの意見を聞くプロセスが明確に見えていない点が気になった。こどもたちに対して「この富山県であなたたちがずっと幸せに暮らせるように応援しているよ」というメッセージが伝わるのが大事。
- ・中学・高校の時点から、自分がどんなライフプランを描いていくのか、何に価値を置くのかということを醸成させることが必要である。若い世代の県外流出への対応として、ふるさと教育ではないが、どれだけ地元に着がえが持てるのかということも含

めた、ライフプランにも着目したらいいのかなと思う。

- ・非正規雇用者になる背景として、学校での対人関係不良や、成績等による自己肯定感の低さが要因となっている可能性があり、一見違う分野の話に思える就労とこども政策には関連性があると思う。つまり、こども政策の充実は就労問題の改善につながり、就労問題の解決が結婚、出産に繋がっていくという見方も必要なのかなと思う。
- ・世間では、「若い女性が流出している」と良く言われているが、人口移動調査を見ると、若い世代は、男性も女性も流出優位になっており、「若い男性も女性も県外に出ているが、男性の方が流入数が多い。」と説明するとか、Uターン率についても触れるなど、細かい情報をもとに分かりやすく説明をしていく必要があると思う。「女性流出」と強調されると、県外流出がマジョリティで、富山県に残る方がマイノリティであるかのように、当事者である若い女性が誤った受け取りをする可能性がある。実際、県内に残った若い女性が「自分は外に出られなかった人」と話す場面に遭遇したことがある。

OC 委員

- ・男性も女性も仕事と家庭を両立させるためには各企業が、長時間労働、残業時間を減らし、生産性の高い働き方ができるような対策を行うことが大事だと思う。例えばデジタル化だったり、無駄な仕事を洗い出してなくしたり、効率化を進めることが大事。
- ・各企業のワークライフバランスに関する制度について、社員が利用しやすくなるような企業内での風土の醸成も必要なのではないかな。
- ・パパの育休関連の動画を見ていた際に、「孫育休」について紹介されていた。世代を超えた子育てを考えていく時に良い取り組みだと感じた。
- ・女性自身がやりがいを持って働き続けるためには、会社がいろいろなキャリアプランがあることを描いてあげることが大事。例えば、今まで女性がいなかった部署に女性を配置することや役職登用を行うことで、女性自身を鍛えていくことも企業として非常に重要なことではないかな。

OD 委員

- ・若い世代が漠然と結婚や出産に対する不安を抱えているのは、そういう世代との関わりが少ないことで、この先どうなるのか想像できないせいではないかなと思う。高校生や大学生、若い世代が実際の今の子育て世代と関わる機会を創出することで、「自分も将来こういうふうになりたい。」と考える若い世代が増えるのではないかな。
- ・パパに育休を取得した理由をインタビューした結果、「会社からの後押し」や、「会社が育休を推進していたから」と答えた方が多かった。反対に、「誰も取ってない」、「上司がいい顔をしなそう」等を理由に育休を取得できていない方もいた。育休を取得しているパパが、オムツ替え等ママと同程度の育児レベルで行動されている姿を見て、育休復帰した後の家事の分散具合に大きく影響すると感じた。育児を同時に始めると、育児レベルはパパもママも同じ状態になると思うので、初期の育休の取得は大事だなと思う一方、富山県は工場等の製造業が多く育休が取りにくいと

いう意見も聞く。そうした場合のアイデアとして、例えば、夕方のこどものお風呂の時間帯だけ家にいるとか、週に1回だけでも仕事を休んで一緒に育児をする等、会社の事業形態に合わせた育児休業の取得の方法を模索することはすごく良いことだと思っている。柔軟な育休の制度があると良い。

- ・富山県はたくさんの政策を実施しているが、なかなか浸透しておらず、悪い部分ばかりがニュースで取り上げられていて、若い世代が「子育て大変だな」という悪い印象を持ってしまっている部分があるが、子育てを通してすばらしい経験ができることや、楽しい部分もたくさんあるので、そういったところの見える化を大事にしていけたら良いと思った。

OE 委員

- ・こどもの子育てや結婚に対するイメージがすごく悪い。それは結局、お父さん、お母さんがどのように子供に伝えているかだと思う。働いていて楽しいか、子育てをしていて楽しいかというところをちゃんとこどもに見せていくことがすごく大事。
- ・社員が健康でやりがいを持って仕事を継続していけるように職場環境改善に取り組んできた。フリーアドレスの導入やテレワーク、スマートムーブ（直行直帰）を推奨している。男性育休だけではなく、フレックス制度も導入していて、自由な働き方ができている。自由な働き方ができることは大事であり、会社の後押しがないとやりづらいと思うので、ここはきちんとやっていきたい。
- ・属人化している仕事が多く、それが原因で残業が増える場合があるが、現在会社で取り組んでいる例として、部内の職務異動を行い、毎年部内のいろいろな仕事を経験し、多能化することで助け合うことができている。
- ・子育て支援等の取組みについて、県内企業、富山県はアピールの仕方、周知の仕方が少し弱いのかなと感じた。お父さんお母さん世代にどこまでアピールできるかが大事だと思う。

OF 委員

- ・射水市は、「子育てするなら射水」、「学ぶなら射水」と以前から子育て支援を打ち出している。射水市の特徴として、外国人の人口比率が高いことが挙げられる。射水市の人口約9万人のうちの3.8%が外国人。20歳以下では4.6%が外国人。外国人の定着、支援をどうやっていくかが課題と考えている。
- ・結婚しない、結婚を躊躇するのは、経済的な要因が一番大きいということは、ほぼ明らかである。収入をどうやって増やしていくのか、支出を軽減するのか、あるいは行政的に給付を行うのか。
- ・射水市は早くから子育て支援に取り組んできたためか、子育てしやすい街だというイメージがあり、子育て世代が流入している。県内の人口の移動では、昨年1年間で射水市の社会移動は、県の西部の方の市町村から流入し、その分がほぼ富山市に流出している状況。
- ・県内各市町村でいろいろな子育て施策をきめ細かく取り組んでいる。市町村の各取組が、上手くいっているという前提に立てば、どのようにしてスタンダード化するかということが大事。スタンダード化する方法としては、最終的には国の政

策に取り入れていただくこと、それまでは県にも配慮をいただければと思う。具体的には、こども医療費の18歳まで無料化、給食費の無料化については、県内各市町村も意識しており、一緒に取り組ませていただきたいと思います。

OG 委員

- ・こども食堂や放課後の居場所づくりに携わり、こどもたちの笑顔をどう輝かせるか、日々考えている。
- ・こどもたちも日々いろいろな出来事で悩んだり迷ったりしているが、一方で、子育てをする親世代も、こどものことを考え過ぎるあまりに悩んだり迷ったりしてしまうことが多いと感じている。子育てをしている側も笑顔でいられることが大切であり、子育てする側のケアの施策があると嬉しい。
- ・こども食堂の数は増えているが、運営する側が年に数回しか開催できないなどの問題もある。継続性も大事であり、こども食堂が当たり前になるよというふうになればいいなと思っている。こども食堂を通して、貧困対策はもちろん、3世代交流や共食など、みんなでコミュニケーションをとることが大切だと思う。
- ・貧困対策や不登校対策などの取組みは難しい問題ではあるが、富山県ももう少し応援していることを、皆さんに知ってもらうことが大切なのかなと感じた。

OH 委員

- ・人生の土台を作る上で、非常に根っことなる部分で0歳から6歳という時期が大切だと感じている。0歳から6歳は幅の広い年齢であり、思いや自分の願いなど、十分な言葉、明確な言葉でなかなか言えない年代のこどももいるため、声にならないこどもの心も、表情や身振り手振りを踏まえながらこどもたちのすべてから受けとめていかなくてはならないと思っている。
幼児教育や保育の充実について、引き続き保育士の専門性の向上が図られる取組みをお願いしたい。
- ・保育幼児教育の施設は、子育ての相談に対応する大切な機関である。子育ては、やりがいがあるが大変さことも少なからずある。しかしながら、子育ての中で喜び合い、夢を感じられる社会の実現ということも大切なことであるかなと思う。様々なライフステージの中で困難なことはそれぞれ違うとは思いますが、たくさんの喜びや、大変さも含め、その思いを共有できる地域の子育てのパートナーとして、保育所、認定こども園などは大きな役割もあると思っている。様々なネットワークの中、保護者の皆様の相談に対応できる機関であることを今後も大切にしていきたい。
- ・保育者にとっても、こどもたちが豊かに育つことが何よりの喜びである。保護者の皆様と手を取り合い、こどもを育てることは非常に尊い仕事である。若い世代の方々が、魅力ある保育士の仕事に興味を持っていただき、志していただけるようなPRを行っていく必要がある。

〇I 委員

- ・夫婦が共に家事育児を行う姿は、将来世代の性別役割分担意識の形成に影響を及ぼすので、共に家事育児を行う姿を見せることは重要ではないかと思う。例えば、休日にお昼ご飯作る場合、「お父さんお母さんどちらがご飯家で作るか？」という質問をした場合、多くの家庭では、「お母さんです。」と回答がある。母親が必ず作る必要性は、そういったことから変えていくことで、こども世代の考え方も徐々に変わっていくのではないか。家事育児のあり方を変えていくには、夫婦それぞれの働き方の柔軟性の高さが重要になっていくのではないかと思う。
- ・祖父母の力を使うことも重要で、孫育て、孫育休制度についても話題に上がったが、非常に興味深く、進めていく必要があると思う。ただ、イタリアは、男女別の役割分業意識が日本と近く三世同居の割合が高く、祖父母が孫の育児をすることが多いが、孫育てをしている祖父母の幸福度がすごく下がってしまうという結果が出ている。日本でも同様の研究があり、孫育てを熱心にやっている祖父母、特に自分の娘の孫育てをしている祖母の幸福度が下がりやすいという傾向があり難しい側面がある。
- ・若い世代に子育ての現場を知ってもらうという試みは非常に重要である。こどもがいる世帯とこどもがいない世帯の数がアンバランスになってきている。同時に、少子化が進み、一人っ子世代の比率も増え、自分より小さい子と関わったことがない世代が増えている。そのことが要因で、将来自分が子育てするイメージが出来なくなっているのではないか。将来的にこどもを持った場合どうなるのか、プラスのイメージを持つことができれば、こどもを持つことに対する考え方も変わるのではないか。

〇J 委員

- ・今回の基本計画の検討の過程で、県民の意見聴取の実施が非常に重要な機会になるのではないかと考えている。こどもはもちろん、これから親になっていくであろう若者、子育てをしている家庭等の意見をどのように聴取していくのが重要である。国のこども家庭審議会では構成員 25 名のうち 4 名は当事者。当事者は、奨学金を受けている学生やヤングケアラーの経験をしている者、児童養護施設の出身者等であり委員として活発な意見を発言されている。県民の意見聴取をどのように実施していくかという点は、今後ぜひ、具体的に検討していただければと思っている。

〇K 委員

- ・こどもや子育て家庭のための施策と、働き方や経済的な課題等の労働経済施策の大きく 2 つの柱があると感じた。この 2 つは対立するものではなくて、循環し影響し合うものであり、そうした観点から議論を深め、今回の基本計画の策定に繋がりたい。また、広く県民のこどもや、当事者の方々の声を聞いていくこともとても大事なことだと思う。